

**The 14th Annual Conference of the Japan Association
for Interpreting and Translation Studies**

日本通訳翻訳学会

第 14 回年次大会

プログラム

2013 年 9 月 7 日(土)－8 日(日)

会場 神田外語大学

日本通訳翻訳学会第14回大会スケジュール

開催日: 2013年9月7日(土)~8日(日)

会場: 神田外語大学

第1日(9月7日)

9:45	受付開始		
10:20 - 10:30	3-301 開会式		
10:30 - 12:00	3-301 基調講演 内在する聞き手と、外在する聞き手 —Oral Interpretation (=作品音声解釈表現法)の立場から— 近江 誠(南山大学短大部名誉教授・近江アカデミー主宰) 講演者紹介/司会 柴原智幸(神田外語大学)		
12:00 - 12:50	3-301 総会		
12:50 - 14:10	昼食		107 評議員会
	3-303 A会場	3-305 B会場	3-301 C会場
14:10 - 14:40	A-1 「日英間ニュース・トランスレーションにおける訳出方略: 新聞の直接引用分析を通じて」 松下佳世(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科D) (司会: 野原佳代子)	B-1 「日本における韓国語通訳の現状と特徴」 矢野百合子(立教大学) (司会: 西村友美)	C-1 「通訳練習を取り入れた英語授業の実践報告—短大における授業レポート及びアンケート分析—」 中島美智子(フリーランス) (司会: 水野 的)
14:50 - 15:20	A-2 「イデオロギーのフレームで再生産されるニュース談論とその翻訳に関する一考察」 朴美貞(韓国外国語大学) (司会: 野原佳代子)	B-2 「国際戦犯法廷における通訳システムの発展」 武田珂代子(立教大学) (司会: 西村友美)	C-2 「日本語も英語も母国語としない学生が日⇄英通訳を学ぶ際の課題と克服策の研究」 佐藤あずさ(早稲田大学大学院国際コミュニケーション研究科) (司会: 水野 的)
15:30 - 16:00	A-3 「顕在化翻訳としての文部省『百科全書』——大槻文彦の翻訳行為と等価を中心に」 長沼美香子(元立教大学) (司会: 三ツ木道夫)	B-3 「法廷通訳人が法曹三者の発言に感じる訳しやすさ・訳しにくさ」 水野かほる(静岡県立大学) (司会: 武田珂代子)	C-3 「ワークショップ「通訳における<概念化>をめぐって」」 船山仲他(神戸市外国語大学) 水野 的(青山学院大学) 染谷泰正(関西大学)
16:10 - 16:40	A-4 「重訳に対する否定的評価について」 ゲン タム タム(神戸大学国際文化学研究科D) (司会: 三ツ木道夫)	B-4 「司法通訳人養成における語彙指導の問題」 吉田慶子(大東文化大学) (司会: 藤濤文子)	
17:00 - 19:00	バルコニー(4号館3F) 懇親会 ※懇親会会費(一般4,000円 学生3,000円)は当日、受付でお支払いください。		

第2日(9月8日)

	3-303 A会場	3-305 B会場	3-301 C会場
9:45 -10:15	A-5 「山田洋次作品「たそがれ清兵衛」「隠し剣鬼の爪」西語字幕翻訳分析—言語文化と字幕翻訳の傾向」 矢田陽子(早稲田大学文学学術院) (司会:藤壽文子)	B-5 “Development and Evaluation of a Novel Education Method for Training for Medical Interpreters(医療通訳システムの開発、評価)” 大野直子(東京大学医学系研究科客員研究員) (司会:中村幸子)	C-4 「Consecutive Interpreting Approachに基づく英語指導法の実際—その具体的効果と学生による授業評価から—」 飯塚秀樹(自治医科大学) (司会:稲生衣代)
10:25 -10:55	A-6 「マンガにおけるオノマトペの翻訳方略」 稲葉杏奈(青山学院大学大学院文学研究科M) (司会:藤壽文子)	B-6 「同時通訳者の作業記憶への占有量が訳出に及ぼす影響」 笠浩一朗・松原茂樹(名古屋大学大学院国際開発研究科) (司会:中村幸子)	C-5 「マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』に見る方言使用」 浜元大輔(琉球大学大学院人文社会科学研究科M) (司会:長沼美香子)
11:05 -11:35	A-7 「字幕翻訳における方略選択の要因」 篠原有子(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科D) (司会:田辺希久子)	B-7 「通訳ノートテイキングの指導法—理論に基づく体系的指導法を目指して」 染谷泰正(関西大学) (司会:中村幸子)	C-6 「翻訳作品と創作作品の比較から見た書き手の言語使用の個人スタイル」 鄧 敏君(致理技術学院) (司会:永田小絵)
11:45 -12:15	A-7 “Fan translation – fan translators’ translation methods and perceptions of fan translation” JUNKKARI Mari (神戸大学大学院国際文化学研究科研究留学生) (司会:田辺希久子)	B-8 「日英語間同時通訳のストラテジー—実践と養成の観点から—」 小松達也(国際教養大学) (司会:稲生衣代)	C-7 「大学・大学院における実務翻訳教育の再考～翻訳初心者に対する機械翻訳+ポストエディットの導入の試み～」 山田 優(青山学院大学) (司会:西村友美)
12:15 -13:45	昼食		
13:45 -14:15	A-9 「欧文脈発生の様子:受身の用法」 齊藤美野(津田塾大学) (司会:三ツ木道夫)	B-9 “Teaching Translation Technologies: a Task-Centered Approach” Tony Hartley (東京外国語大学) (司会:山田 優)	C-8 「通訳教育および指導法研究プロジェクト・翻訳研究育成プロジェクト合同シンポジウム」大学における通訳・翻訳教育の社会的意義」 基調報告・司会:鳥飼玖美子(立教大学)
14:25 -14:55	A-10 “Erasing the Translators: A history of pirated translation in Taiwan, 1949-1987” Lai, Tzu-yun (National Taiwan Normal University) (司会:武田珂代子)	B-10 “MNH-TT to Support Collaborative Translator Training” Tony Hartley(東京外国語大学), Kyo Kageura(東京大学), Martin Thomas (University of Leeds), Masao Utiyama (NICT) (司会:山田 優)	通訳教育パネリスト: 中村幸子(愛知学院大学) 稲生衣代(青山学院大学) 西村友美(京都橘大学) 翻訳教育パネリスト: 田辺希久子(神戸女学院大学) 長沼美香子(元立教大学) 野原佳代子(東京工業大学)
15:05 -15:35	A-11 “3000 Leagues in Search of Mother: The translation Journey from Italy to China via Japan” Hung-Shu Chen (Taipei Municipal University, Taiwan) (司会:武田珂代子)	B-11 「同時通訳の習熟度比較:大学院授業での韓一日同時通訳を中心に」 金漢植(韓国外国語大学) (司会:水野 的)	企画・調整:河原清志(金城学院大学)
15:45 -16:15	A-12 「学部における時事英語」 鶴田知佳子(東京外国語大学) (司会:野原佳代子)		C-9 「学部生の通訳ボランティア経験 実践報告」 友野百枝(大阪女学院大学) (司会:稲生衣代)

- 研究発表＝20分、質疑応答＝10分(質問は発表内容に直接関連したことについてのみ手短に行うものとします。質問者の単なる意見の陳述はご遠慮ください。
- 各発表間の10分間は出入室のための時間です。移動はすみやかにお願いします。
- 発表スケジュールにある (M),(D) は発表者がそれぞれ博士前期課程(修士課程)、博士後期課程の学生会員であることを示します。

発表者の皆さんへ:

- プロジェクターとパソコンは各教室に用意してあります(ただし、ウィンドウズ対応のみ)。パワーポイントをご使用の方は Power Point 2007までの形式でファイルを作成・保存した上で、データを USB メモリーに入れて当日ご持参ください。それ以降の形式で保存したものは会場のパソコンでは再生できない可能性がありますのでご注意ください。
- パソコンをご持参の方は各自発表前に会場で接続の確認をしていただくようお願いします。
- PC がうまくいかない場合の対策の意味合いも含め、コピーを配布資料として準備しておいてください。枚数は 40 枚程度お願いします。

[大会実行委員会] 柴原智幸(委員長)、関東支部運営委員、神田外語大学学生他

[大会プログラム委員会] 水野的、西村友美

会場アクセス



* JR 京葉線 海浜幕張駅より 徒歩約 15 分(経路は現地で学生がご案内いたします)

バス約 5 分(幕 22 系統)神田外語大学下車

発車時刻 毎時 5 分 25 分 45 分

* JR 総武線、京成電鉄 幕張本郷駅より

バス約 15 分(幕 21 系統)、8 分(幕 22 系統)神田外語大学下車

幕 21 系統

時	分
7	30
8	00 30
9	00 50
10	50 (以降 15 時まで同じ)
16	20 50
17	30
18	00 40
19	30(最終)

幕 22 系統 発車時刻 毎時 15 分 35 分 55 分

会場案内

*会場は3号館の1階と3階です。

バス停から正面の渡り廊下の下をくぐり、左斜め前の建物になります。

現地で学生がご案内いたします。

*学食(4号館1階)は、7日土曜日は営業しておりますが、日曜日は営業しておりません。

8日日曜日は、お昼のご用意をして会場入りしていただきますよう、お願いいたします。



第1日(9月7日) 10:30-12:00

3-301

講演者紹介／司会 柴原智幸(神田外語大学)

<基調講演>

内在する聞き手と、外在する聞き手

—Oral Interpretation (=作品音声解釈表現法)の立場から—

近江 誠

(南山大学短大部名誉教授・近江アカデミー主宰)

一編の文章がある。それが詩、随筆、小説、スピーチであろうと、当然その語り手がいれば意図した聞き手がいる。また語りの時(事件などの「時」とは区別)、場所、目的、内容、様式の7つのポイントが内在しておりそれを発見してのがコミュニケーション的精読、すなわち批判的味読である。オーラルインタープリテーション(あるいはインタープリティバーディング)は、語り手の立場になって、彼の代弁者として解釈したように朗読・演技する西洋の演劇・スピーチの伝統を汲むスピーチ(訓練)である。当然、語り手が意図した聞き手と、実際読み上げる場にいる聞き手とは一致しない場合が多い。通訳者・翻訳者も、内なる聞き手と外なる存在のいずれにも「不義理」をすることは許されないであろう。ではいったいどうしたらいいだろうか。



<プロフィール>

1941年 静岡生まれ

1967年 フルブライト留学生。ボール州立大学、インディアナ大学院でスピーチとドラマ学を専攻、71年に帰国。1971年より南山大学、同短大、名古屋大学講師。1998年 コロンビア大学客員研究員。日本コミュニケーション学会長(5,12代)。現在:南山大学短大部名誉教授、近江アカデミー主宰、京都外国語大学(大学院)講師。

著書に『オーラル・インタープリテーション入門』(大修館書店)、『頭と心と体を使う英語の学び方』(研究社出版)、『英語コミュニケーションの理論と実際——スピーチ学からの提言』(研究社出版・1997年度大学英語教育学会実践賞)、『間違いだらけの英語学習』(小学館)、『感動する英語!』(文藝春秋)、『挑戦する英語!』(同上)、『歴史に残る大統領の就任演説』(小学館)等がある。

1 日目 A 会場(3-303) 14:10 – 14:40

司会 野原佳代子

A-1

日英間ニュース・トランスレーションにおける訳出方略:新聞の直接引用分析を通じて

松下佳世 (立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程)

グローバル化の進展とインターネットを活用した報道の速報化は、国際ニュースにおける訳出行為、すなわち「ニュース・トランスレーション」の実践を大きく変えようとしている。日本においても、外国で起きた出来事や外国語で語られた発言が日本語に訳され、ほぼ瞬時に報じられることはもはや当たり前となった。同時に、橋下徹大阪市長の「従軍慰安婦」にまつわる発言を例に取るまでもなく、日本の出来事や、日本の要人の発言もまた、即座に訳されて世界を駆け巡り、時には大きな国際問題にも発展している。このように、ニュース・トランスレーションの果たす社会的役割は決して小さくないにもかかわらず、その担い手や訳出プロセスについては、これまで翻訳学においても、メディア研究においても中心的な研究対象とはされてこなかった。2000年代半ば以降、特に欧米において研究が活発になってはいるものの、日英間のニュース・トランスレーションについては、十分な研究がなされているとは言い難い。

そこで、本発表では日本の主要メディアの一つである新聞に焦点をあて、翻訳のプロではない記者(journalist-translator)の訳出行為を比較分析する。具体的には、2012年の米大統領選を報じた日本の在京主要5紙の記事を対象に、オバマ大統領の勝利宣言や就任演説を直接引用した箇所を比較し、ニュース・トランスレーションに特有と思われる事例を抽出して考察を行う。そして、字数や時間の制限に対処するため、訳出方略としては「省略」が多く用いられていること、またその方法は、起点テキスト(ST)への忠実性を最重要視するものではないことなどを明らかにする。記事の作成において、特に正確性が求められる直接引用を分析対象とすることで、日本語の発言をそのまま日本語で引用する場合とは異なるニュース・トランスレーションの実態を可視化し、その課題の一部を浮き彫りにすることを試みる。

1 日目 A 会場(3-303) 14:50 – 15:20

司会 野原佳代子

A-2

イデオロギーのフレームで再生産されるニュース談論とその翻訳に関する一考察

朴美貞 (韓国通訳翻訳大学院日本語科)

新聞のニュースはレイス (Reiss) が分類したテキストタイプによると、情動的 (informative) テキストである (1971/2000)。情動的テキストの特徴は事実の伝達にある (1977/89:108-9)。しかし、ニュースは社会的現実と経験的事実をありのまま中立的に反映するとは限らない。本稿の研究目的は、公正で客観的な事実を伝達するとされている新聞が、保守と進歩が真っ二つに分かれるような争点については異なるイデオロギーのフレームでニュース談論として再生産されるということに着目し、保守的あるいは進歩的な報道や論調が翻訳によってどのように影響されるかを考察することにある。本稿では、韓国の代表的な3大保守系新聞 (朝鮮日報、東亜日報、中央日報) と代表的な進歩系新聞 (ハンギョレ新聞) の‘盧武鉉 (ノムヒョン) 元大統領 による NLL (北方限界線) をめぐる発言 に関するニュースとその‘韓→日’、‘韓→英’翻訳を分析対象にする。‘北朝鮮’問題は、韓国の世論を保守と進歩に二分させる代表的な政治談論である。特に、NLL 発言関連ニュースについては、盧武鉉 (ノムヒョン) 元大統領の‘説得メッセージ’をめぐる解釈が保守派と進歩派によって大きく異なる。本研究では、このような説得メッセージの ST(Source Text: 起点テキスト) と TT(Target Text: 目標テキスト)をジャーナリズムのフレーム理論と Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論の観点から比較・分析する。

1 日目 A 会場(3-303) 15:30 – 16:00

司会 ミツ木道夫

A-3

顕在化翻訳としての文部省『百科全書』——大槻文彦の翻訳行為と等価を中心に」

長沼美香子（元立教大学）

19 世紀のナショナリズムは、各国の「国語」辞書を生み出した。例えば、グリム兄弟の『ドイツ語大辞典』、リトレの『フランス語辞典』、ウェブスターの『アメリカ英語辞典』、またイギリスでは『オックスフォード英語辞典』などが同時期に立案されているのは、偶然ではない。そして、近代国家への仲間入りを目指していた明治期の日本も例外ではなかった。大槻文彦の『言海』はわが国初の「近代国語辞書」として著名である。だが彼が辞書編纂と並行して翻訳していたテキストの存在については、従来あまり注目されてこなかった。文彦が翻訳を担当した文部省『百科全書』の「言語篇」は、西洋の言語学をはじめて日本に紹介した画期的な内容であったが、今ではほとんど知られていない。文部省『百科全書』とは、明治政府に新設された文部省に出仕していた箕作麟祥や西村茂樹らが中心となって企図した 91 編の翻訳啓蒙書である。この翻訳プロジェクトには多数の洋学者や和漢学者がかかわっており、明治初期の大規模な国家的事業であった。現存する様々な異本が本書の流通と消費の多様さを物語る。翻訳の底本となったのは、英国ヴィクトリア朝期にエディンバラで出版社を興したチェンバーズ兄弟 (William and Robert Chambers) の *Chambers's Information for the People* である(柳田泉は本書を「国民須知」として紹介した)。本発表で特に焦点をあてるのは文部省『百科全書』の一編である大槻文彦訳「言語篇」(原題は Language) であり、近代日本における「顕在化翻訳」(overt translation) と「等価」(equivalence) という視点から、明治期の翻訳テキストへのアプローチを試みる。

1 日目 A 会場(3-303) 16:10 – 16:40

司会 ミツ木道夫

A-4

重訳に対する否定的評価についての考察

グエン タン タム (神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程)

翻訳と言えば、通常は直接翻訳が思い浮かぶだろう。重訳(または間接翻訳 indirect translation)すなわち媒介言語を介した翻訳、特に文学作品の重訳は「不完全な翻訳のまたそのコピー」、或いは「価値がない」と思われがちだ(St. André, 2009)。従って、一般読者にも研究面でも、関心もたれにくい領域のようであった。しかし、実際の翻訳史から見ると、重訳は社会・文化的背景や翻訳者不足などの理由により、各国で多く発生しており、知識・文化の伝播の過程に重要な役割を演じてきたということが分かった。例えば、1990年代までのベトナムは、日本との国際交流に多くの障害があり、日本の言語・文化の専門家が非常に少なかったため、日本文学は主に中国語、フランス語やロシア語を媒介して、ベトナム語に訳されていた。2002年以降、日本文学の直接翻訳が多く行われるようになり、重訳は減少する傾向にあるが、現在でも重訳が存在しており、また「新しい重訳」¹の形式も出ているようだ。

このように、「文学的交流を特に歴史的に考察するには、重訳という現象抜きには考えられない」²という理由で、近年重訳に対して注目が集まり、実質のある先行研究が次々に発表されており、重訳を研究する価値が認められるようになってきている。

一方、訳漏れや誤訳は直接翻訳にも見られるものである。さらに、日本文学の重訳に対するベトナム人読者の意見調査で、重訳と直接翻訳があまり区別できずに、優れた翻訳は大体直接翻訳だと判断している傾向がわかった。このような状況を背景に、本発表では、読者アンケート調査の結果を基にして、重訳について考察していくことにする。まず、重訳に対してどのような否定的評価があるか、またその主な理由は何かを整理する。次に、偏見と批判を乗り換える方法を考えた上で、重訳の今後の可能性を検討しようと試みる。

参考文献

Ringmar, Martin (2007). 'Roundabouts routes: Some remarks on indirect translations',

<http://www.arts.kuleuven.be/info/bestanden-div/RINGMAR.pdf>, 2013年6月1日閲覧.

St André, James (2009). 'Relay', in M.Baker and G.Saldanha (eds.) Routledge Encyclopedia of Translation Studies, Routledge. pp230-232.

注 1) 媒介言語の翻訳を使いながら、原文も参考にして翻訳を進めるという方法である。

注 2) Ringmar (2007: 4)

2 日目 A 会場(3-303) 9:45 – 10:15

司会 藤濤文子

A-5

山田洋次作品「たそがれ清兵衛」「隠し剣 鬼の爪」西語字幕翻訳分析—言語文化と字幕翻訳の傾向

矢田陽子（早稲田大学文学学術院）

山田洋次監督の「たそがれ清兵衛」が 2003 年にアカデミー賞外国語賞にノミネートされ、ドイツ・イギリスなど欧州で高い評価を受けた。「たそがれ清兵衛」にはステレオタイプの侍の姿ではなく、勘定方の平侍の慎ましやかな生活が描き出され、台詞も山形・庄内地方の訛りがゆえに、日本人にとっても異文化を窺っているような錯覚さえ覚える作品である。また、外国人視聴者にとっては、根底に江戸末期の社会構造ゆえに、歴史的事実や言語表現が理解の壁になり得るのだが、その「言語文化差異」を乗り越え、観客の理解を導くのが字幕である。

そこで、本発表では、山田洋次作品「たそがれ清兵衛」「隠し剣 鬼の爪」といった山田洋次監督作品のなかでも、江戸末期の東北（山形庄内地方）の武士の姿を描いた 2 作品のスペイン語字幕を用いて、日本語—スペイン語間の翻訳故の言語文化を翻訳において再現（表現）することの難解さを検証し、翻訳理論の観点から分析する。

研究発表目的

山田洋次監督作品のうち、同時代、同背景を描いた 2 作品のスペイン語字幕翻訳を用いて、以下の点を分析する。

- ①言語文化が色濃く表されている表現もしくは固有名詞がどのようにスペイン語の字幕に訳されているのかを分析する
- ②なぜ、その訳になったのか、その要因（歴史的背景、時代性、など）を分析する。
- ③また、これら事例翻訳分析は、翻訳理論を基に行う

2 日目 A 会場(3-303) 10:25 – 10:55

司会 藤濤文子

A-6

マンガにおけるオノマトペの翻訳方略

稲葉杏奈（青山学院大学大学院文学研究科博士前期課程）

近年日本のマンガは西洋諸国にとって、世界最大の翻訳分野の一つとなり、“MANGA”という世界共通語となった。海外にも“comic strips”, “comic magazines”と称されるマンガは存在するが、“MANGA”とは異なった分野として挙げられている。日本のマンガは世界各国で多くのファンによって愛されるものとなり、アニメーション化された作品は海外でも放送されている。日本のマンガが海外で不動の人気を持つ要因として、その内容と高度な技術(画力、繊細な描写)が指摘されることが多いが、翻訳の存在を見逃すことはできない。海外のマンガ読者、ファンの心を掴むためには高度の日英翻訳が求められる。

今回の発表は日本のマンガの「オノマトペ」がどのように翻訳されているかに注目する。「オノマトペ」(擬音語、擬声語)は、公文書や学術書などをのぞき、日常会話をはじめあらゆる場面で使用されており、児童文学や童話、通常の小説にも多く取り入れられている。オノマトペはまた、マンガの描写においても重要な役割を果たす。一般にオノマトペは絵や文字を媒体にした作品においては、読者に情景を描写しやすいようにする働きを持ち、作品にインパクトをつける効果がある。日本の文学作品の翻訳ではオノマトペがそのまま訳されず、省略されたり別の形式で翻訳されることが多いことが知られている (Flyxe 2002) が、本発表ではマンガにおいて不可欠な機能をもつオノマトペが、どのようにして海外のファンが求める「日本らしいマンガ」という形を崩さずに翻訳されているかを考察する。

2 日目 A 会場(3-303) 11:05 – 11:35

司会 田邊希久子

A-7

字幕翻訳における方略選択の要因

篠原有子（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程）

文化をどのように訳出するかは翻訳上の問題となる場合がある。本研究では日本映画の台詞に現れる異文化要素が英語字幕の中でどのように処理されているのかを探るために 6 本の日本映画の英語字幕について検証し、そこから導かれる訳出志向を同定した上で、そうした訳出志向が生まれる要因について考察を行う。

まず異文化要素とは何かを定義した上で、事例研究として行った『おくりびと (Departures)』の分析結果を踏まえて、ペダーセン (2011) の方略分類に修正を加えた。そして新たに案出した方略分類に基づいて、上記作品を含む 6 本の日本映画の英語字幕を分析した。その結果、6 作品全体としての英語字幕の訳出志向は起点志向と目的志向のほぼ中間に位置することが示されたが、一方では、個別的には各作品の方略選択の傾向に差異があることも認められた。

本発表では 6 作品全体としては中間的な訳出志向が示されたものの、作品ごとに見ると各方略の採用頻度に違いが認められた点に注目し、それぞれの作品の方略選択の違いを生む背景を、映画の内容や製作背景などの観点から論じる。さらに英語字幕の中間的な訳出志向を導く要因とは何かについて考える。具体的には、1) 翻訳者の訳出に対する姿勢、2) 字幕制作参与者の関与、3) 海外における日本映画の受容、4) ローカリゼーションにおける中間言語としての英語字幕、などについて日本語字幕との比較も交えて考察する。なお、本発表は 2013 年 6 月 29 日翻訳研究育成プロジェクト第 5 回／関東支部例会第 31 回合同講演会での発表に修正を加えたものである。

2 日目 A 会場(3-303) 11:45 – 12:15

司会 田邊希久子

A-8

Fan translation – fan translators' translation methods and perceptions of fan translation

JUNKKARI Mari (神戸大学大学院国際文化学研究科研究留学生)

Rapid technological development and the Internet have significantly changed the field of translation. Large amounts of digitalised content can be globally disseminated at low cost and with little effort, and various forms of free software allow the crowds to participate in translation of anything that is considered worth rendering into other languages. This has created a phenomenon called fan translation.

Fan translation generally refers to unofficial, fan-produced, translated version of Japanese anime (*fansubbing*) and manga (*scanlation*). Fan translators are not professional translators in the sense that they do not receive any compensation in money for it; no reference is made to whether they are untrained or not. Although fan translations constitute copyright infringement and are thus technically illegal, they might raise awareness of the product, and create new potential markets for Japanese popular culture (Borodo 2010).

The purpose of this research is, firstly, to study fan translators' perceptions of their activity and role as promoters of Japanese (popular) culture, and secondly, to examine the translation strategies/tactics, norms, and guidelines used by fan translators. Research data will be gathered through a web-based questionnaire, interviews, and the follow-up of Internet discussion forums during the winter/spring 2013–2014.

The translation strategies used by fan translators seem to clearly differ from those applied by professional translators, and fan translators often are well aware of these differences. In addition, fan translators seem to have strong opinions on the way anime and manga should or should not be translated.

Literature

Borodo, M. 2010. *The Rise of the Amateur Translator*. Presentation in the 6th EST Congress “Track and Trecks in TS”. Katholieke Universiteit Leuven. 23.–25.9.2010.

2 日目 A 会場(3-303) 13:45 – 14:15

司会 三ツ木道夫

A-9

欧文脈発生の様子: 受身の用法

齊藤美野 (津田塾大学)

明治期に英語を含む西欧言語からの翻訳が大量に行われ、翻訳作品・語学書などを通し、日本語に新たな要素が移入された。「欧文脈」と呼ばれる、西欧言語の表現形式や文法に影響を受けた、文章法・語法の発生もこの頃の日本語の変化の一部である。本研究は明治期の文学翻訳テキストを分析し、欧文脈発生の様子を確認する。欧文脈の特徴とされる形式は様々にあるが、そのうち「非人称主語の受身表現」に注目する。日本語の受身は複数の使用法があり、人が主語・主題になり被害を被っているという感情を表す、あるいは恩恵の意味を表す「有情主語の受身」(「子どもが怒られる」「太郎が愛される」など)、また「非情主語の受身」と呼ばれる、動作を受けた物が主体となる用法(「ニュースが伝えられる」など)がある。このうち非情主語の受身の用法は比較的新しく、明治時代以降に欧米作品の翻訳を通して日本語に普及し定着したとされる(富田, 1993, p. 185)。

明治時代の翻訳作品においては、非情(非人称)主語の受身はどの程度見つかるだろうか。英語作品を底本とする翻訳作品を調べ、起点テキストにある受身表現のうち特に物が主語である表現が、日本語の翻訳作品においてどのように表されているか見る。翻訳作品は、森田思軒(1861-1897)を含めた複数名の翻訳者によるものを取り上げる。本発表は、欧文脈の特徴のうち徹視的に受身表現のみに焦点を当て、翻訳が日本語に与えた影響を考察する研究の一端としたい。

引用文献:

富田隆行(1993). 『これだけは知っておきたい日本語教育のための教授法マニュアル 70 例 下』凡人社.

2 日目 A 会場(3-303) 14:25 – 14:55

司会 武田珂代子

A-10

Erasing the Translators: A history of pirated translation in Taiwan, 1949-1987

LAI, Tzu-yun 賴慈芸 (National Taiwan Normal University)

Despite cultural and linguistic ties between the two places, Taiwanese publishers found it illegal to publish translations penned by living translators in Communist China during the Taiwan's martial law period (1949-1987). At this point in time, Japan's 50-year rule of Taiwan had only recently ended in 1945, and the people in Taiwan, who were used to an education in Japanese and were mostly descended from Southern Chinese families speaking regional languages, were not familiar with the northern Chinese language of Mandarin or the modern form of written Chinese (*baihua wen* 白話文) based on it. As there was an unsurprising shortage of translators versed in Mandarin and other foreign languages, many translations in Taiwan circulating in the 1950s and 1960s were therefore reprints of works published in China before 1949. To avoid violating martial law restrictions, Taiwanese publishers were forced to either publish these "illegal" translations anonymously or under fabricated names, and as a result, 40% of translated titles in Taiwan have "unknown" listed for the translator in existing bibliographies in Taiwan. It is not clear how many more translations on top of those have been printed using fake names. The present research finds that at least 400 translated titles published in China were pirated in Taiwan under fabricated names or "unknown translators" during the martial law period; some translations of well-known novels were reprinted over 20 times and attributed to several different fake translators. Without knowing the real translators, the field of translation history in Taiwan remains a chaotic mess. If we cannot even ascertain when and where the translations by those unknown ghost translators were first published, it is impossible to understand the formation and shift of translation norms. This paper aims to describe the political and linguistic reasons for the large-scale decades-long piracy of translation, and tries to lay the groundwork for further study of Taiwan's translation history.

Key words: Translation history in Taiwan, translators in China, martial law period, pirated translations

2 日目 A 会場(3-303) 15:05 – 15:35

司会 武田珂代子

A-11

3000 Leagues in Search of Mother: The translation Journey from Italy to China via Japan
Hung-Shu Chen (Taipei Municipal University, Taiwan)

3000 Leagues in Search of Mother (母をたずねて三千里) is a well-known Japanese anime television series aired in 1976. It was dubbed in Chinese and became an instant success in Taiwan in 1977. This story, adapted from a portion of the Italian novel *Cuore*, was first introduced into China, also via Japan, in the early 20th century. After my investigation of the publication information, as well as careful comparison of several texts, I verify that the first Chinese version was translated by Bao Tianxiao (包天笑) in 1905 from the first Japanese version, which was in turn translated by Hara Hōitsuan (原抱一庵) in 1902. Hara's Japanese version, however, was not derived from the Italian original but from an English translation by Isabel F. Hapgood in 1887. This translation journey from Italy to America to Japan to China brings some intricate and interesting issues to the fore, and the differences among these versions place the translator's role in the spotlight.

In addition to clarifying and confirming the translation history of this touching story, I try to observe the features shown in these translations. The main methodology used in this study is close reading. It is a thorough method, combined with literature review, to balance intra-textual and extra-textual factors and build a link between the translated text and its context. The research results reveal that these translators were largely influenced by their own agenda, the norm of his/her society, and the style of their source text, so their respective translation may not be just a faithful reflection of its source text but an afterlife that creates its own style or effect.

Key words: Bao Tianxiao, Hara Hōitsuan, translation history, indirect translation

2 日目 A 会場(3-303) 15:45 – 16:15

司会 野原佳代子

A-12

学部における時事英語

鶴田知佳子（東京外国語大学）

学部での通訳教育における時事英語の指導方法を考察する。日本では欧米や韓国とは違い大学・大学院から通訳者になる割合は必ずしも多くはなく、通訳教育と並行して語学力強化を行っていくことが必要であり、特に学部においてはその傾向が強い。そのような中で通訳教育を行う上での時事英語の指導方法を考察する。今年より指導方法を変えて、フィードバックメールを含めて、すべて英語で授業運営を行っている。

学部での通訳教育の一環での時事英語の教育にとりいれることのできる具体的なエクササイズや毎週の課題を提示し、どのような効果がみられたかを学生のフィードバックメールなどをもとに検討する。

1 日目 B 会場(3-305) 14:10 – 14:40

司会 西村友美

B-1

日本における韓国語通訳の現状と特徴

矢野百合子（立教大学異文化コミュニケーション学科）

日本の韓国語通訳の歴史は古代に遡ることができるが、日本国内の通訳エージェントがいわゆるプロの会議通訳者登録を開始したのは 1980 年代後半になってからで、まだ 30 数年の歴史しかない。本発表では、日本における韓国語通訳の流れと現状を概括した後、両言語間の通訳に特徴的な問題点の分類を試みる。よく知られているように、日本語と韓国語は同じ漢字文化圏に属し、言語構造においても共通点が非常に多い。そのため、通訳志望者を含めて、両語間の通訳は単語を置き換えるだけの比較的安易なものだと誤解されることが多く、言語距離が近いがゆえに通訳者が遭遇する困難や、他言語へのリレー通訳時の留意点等についてはあまり知られていない。本発表では、類似言語間の通訳に特徴的な問題点として、日韓間の通訳が相手言語の漢字語彙や文法に引きずられる現象をとりあげて、不適切な訳出の分類を試みる。あわせて、第 3 言語からの翻訳語の相違や、中国語・英語等の非対照言語とのリレー時に留意している点などを紹介したい。

1 日目 B 会場(3-305) 14:50 – 15:20

司会 西村友美

B-2

国際戦犯法廷における通訳システムの発展

武田珂代子 (立教大学)

旧ユーゴスラビア国際刑事裁判所 (International Criminal Tribunal for the former Yugoslavia、以下 ICTY) では、その案内文献などを通して、「ニュルンベルク・東京裁判以来初の国際戦犯法廷」として ICTY を位置づけ、国際刑事裁判は 1945 年および 1946 年にそれぞれ開廷したニュルンベルクおよび東京国際軍事裁判を起源とし、それが ICTY、さらにルアンダ、東チモールなどの国際刑事裁判へとつながったという見方を打ち出している。歴史や国際法の研究者の間でも「ニュルンベルク・東京」が今日の国際戦犯法廷の礎となったという認識がある。たとえば、多谷 (2006) は東京裁判とニュルンベルク裁判が「人道に反する罪」や「コマンド責任」などに関してその後の国際法の発展に寄与したとし、両裁判の経験が ICTY やルワンダ国際刑事裁判所、さらに国際刑事裁判所の設立を可能にしたと述べ、戸谷 (2008) は、ニュルンベルクと東京の「横のつながり」と、両者と ICTY、ルワンダ、シエラレオネなどとの「縦のつながり」を指摘している。

「つながり」があるとされるこれらの国際法廷では、いずれも複数の言語が使用され、通訳なしにはその運営が成立し得なかった。国際法廷における多言語使用を可能にする通訳システムの歴史という側面を考えたとき、「ニュルンベルク・東京」と ICTY の間に国際法の発展と同様のつながりはあるのだろうか。ニュルンベルク裁判と東京裁判で使用された通訳システムでの経験が土台となり、司法の場における通訳の進展につながったという議論は成立するのだろうか。

そうした疑問に答えるのが本発表の目的である。まず、ニュルンベルク裁判および東京裁判における通訳の特徴と歴史的意義を概括する。次に進行中の ICTY における通訳の概要と、通訳者が直面する課題のいくつかを紹介する。最後に、「ニュルンベルク・東京」と ICTY の通訳システムをつながりの可能性を探り、各国の国内法廷における通訳実践とのつながりについても簡単に述べる。

多谷千賀子 (2006) 『戦争犯罪と法』岩波書店

戸谷由麻 (2008) 『東京裁判』みすず書房

1 日目 B 会場(3-305) 15:30 – 16:00

司会 武田珂代子

B-3

法廷通訳人が法曹三者の発言に感じる訳しやすさ・訳しにくさ

水野かほる（静岡県立大学国際関係学部）

法廷通訳人の就労実態を明らかにするため、2012 年度に法廷通訳経験者に対する質問紙調査「法廷通訳の仕事に関する調査」(回答者 101 人)を実施した。これは、当事者の声を集積する形で通訳人の心身への負担の実態を明らかにする量的調査である。2009 年5月に始まった裁判員裁判では、集中審理で直接主義口頭主義をとるため、法廷通訳人の負担が以前よりも増えたと思われる。本調査では、法廷通訳にとって法曹三者のどのような発話が分かりやすく訳しやすく感じられる話し方であるか、逆にどのような発話が訳しにくい、通訳人への配慮があるかどうか等の調査も行った。これらは、訳しやすい日本語運用方法の開発を通じて法廷通訳を始めとする司法通訳人の負担軽減に資することになり、誤訳や訳し漏れがなく正確で円滑な通訳を進行するために重要な意味を持つと考える。

単純集計の結果、主語と述語が明確で構造が分かり易く短い文で話すと訳しやすい日本語となり、その逆だと訳しにくい。法律の用語ではなく日常的で具体的な言葉を使用し、否定の重複を避ける等が訳しやすい日本語を導くことが分かった。また、第一言語が日本語以外の通訳人及び自分は法廷通訳人としてビギナーであると考え通訳人は、法曹三者の声の大きさや話す速度、発音、文の長さ等の発話の物理的要因に対してより訳しにくさを感じているが、自分はベテランだと思う通訳人は文の構造や話者の発言の意図の不明瞭さ等に分かりにくさを感じている。

この他、自由回答欄への記述や法廷通訳人へのインタビュー調査から分かったこと等を含めて発表を行う。

1 日目 B 会場(3-305) 16:10 – 16:40

司会 藤濤文子

B-4

司法通訳人養成における語彙指導の問題

吉田慶子（大東文化大学）

司法通訳人は、通訳の技能だけではなく、法律専門用語や法的理念を理解しなければならない。

法学知識のない学習者にとって、はじめて触れる法律の世界のその独特の論理や難解な用語や言い回しについて、最初は戸惑うことが多い。

特に、法律専門用語について、実際意味もわからずに鵜呑みにして大量な語彙を暗記するのは、学習者にとって酷である。従って、教師側が指導項目に合わせ語彙の出現頻度や、事件別に、大量な語彙を選別、分類し、段階的に導入していく必要がある。

発表者は立命館大学法学部の専門中国語を約 5 年担当し、2010 年から 2013 年まで、立命館孔子学院の社会人を対象にした司法通訳翻訳養成（中国語）プログラムの企画開発と講義を担当。2013 年 4 月から関西外語専門学校の日中通訳翻訳養成専攻の「法廷通訳」科目（2 クラス）を担当してきた経験からまとめたものである。発表者自身の実務経験から、司法通訳人を養成するにあたって、いかに合理的、効果的に語彙の選別と分類を行い、教育内容を実施する際の語彙指導の問題点、そして、解決法を模索してきたものである。

2 日目 B 会場(3-305) 9:45 – 10:15

司会 中村幸子

B-5

Development and Evaluation of a Novel Education Method for Training for Medical Interpreters(医療通訳養成システムの開発、評価)

大野直子 (東京大学医学系研究科客員研究員)

【目的】

本研究の目的は、医療コミュニケーション・通訳理論に基づいた医療通訳養成システムを開発し、評価することである。外国人居住者が増加する中で、医療通訳の重要性がメディアで報じられ、各地で医療通訳養成講座が創設されている。本研究では文献のシステムティックレビューにより、医療通訳に必要なスキルを特定し、医療通訳者養成システムを開発し、評価する。

- 1) 医療通訳養成に効果のある要素を明らかにし、医療通訳養成システムを開発する。
- 2) 開発したシステムによる教育の効果を無作為化比較試験によって評価する。

【方法】

- 1) 医療通訳に関する先行論文をレビューし、医療通訳養成に効果のある要素を明らかにする。
- 2) 参加者を介入/対照群にランダムに割り付けた上で、3 日間(20 時間)のプログラムを行う。

【結果】

- 1) 医療通訳に関する先行論文をレビューした結果、医療通訳に必要なスキルは①正確な通訳、②医療用語や人体に関する知識、③医療通訳倫理、④非言語コミュニケーションスキル、⑤異文化コミュニケーションスキルであった。
- 2) 開発した医療通訳養成システムを用いて学習者への実験的介入を行った。介入群において通訳の質の改善(言い足しミス減少、訳出した文章数の向上)が有意に大きくみられた。また、筆記試験の得点も介入群で有意に大きく上昇していた。非言語コミュニケーションスキルについては、有意差は認められなかった。

【結論】

開発した医療通訳養成システムは、学習者の通訳の質、知識(筆記試験点数)の改善に有効であり、プログラムの有効性が確認された。しかし、サンプル数が少ないため、本研究の結果に基づきプログラムの改善をしたうえで、より大規模なサンプルで効果を確認することが求められる。

2 日目 B 会場(3-305) 10:25 – 10:55

司会 中村幸子

B-6

同時通訳者の作業記憶への占有量が訳出に及ぼす影響

笠浩一朗・松原茂樹（名古屋大学大学院国際開発研究科）

同時通訳理論に関する研究では、通訳プロセスをモデル化することは避けては通れない問題であり、これまでもいくつかの通訳モデルが提案されている (Gerver 1976, Moser 1978, Gile 1989, Seleskovitch 1989)。これらのモデルではいずれも、通訳者は原発話の内容を何らかの形で一時的に保持していることを想定しており、通訳者が短期的に記憶する仕組み(作業記憶)を持つことは広く共有された認識である。そのため、通訳者の作業記憶について分析することは、通訳プロセスを解明する上で重要なテーマであると言える。

一方、同時通訳は、記憶以外にも、聴取、理解、翻訳、訳出などの複数の作業を同時に遂行しなければならないため、通訳者は各作業への注意の配分を意識的、もしくは、無意識的に行っていると考えられる (Gerver 1976)。また、一般に、ある作業を重視し、それに対する注意の配分が増えた場合、他方が疎かになることは容易に想像できる。

そこで本発表では、通訳者が作業記憶で保持している情報の増減が、同時通訳者の訳出にどのような影響を与えるかについて定量的に分析した結果について述べる。

本分析では、影響が想定される通訳者のふるまいとして、発話の有無、発話速度などの通訳者の発話状況から観察されるものと、訳出遅延時間、訳出率などの原発話と通訳者発話との関係から観察されるものに焦点をあてて、実施した。本分析には、同時通訳データベース(松原他 2001)の英日通訳データを用いた。使用したデータは、21 の英語講演データに対する複数の通訳者による 88 例の英日同時通訳データである。

2 日目 B 会場(3-305) 11:05 – 11:35

司会 中村幸子

B-7

通訳ノートテイキングの指導法——理論に基づく体系的指導法を目指して

染谷泰正 (関西大学)

逐次通訳におけるノートテイキング(NT)が通訳者にとって必須のスキルであることは誰も認めるところである。ところが、NT スキルの習得については、現在のところこれといった方法論がなく、各自が見よう見まねで体験的に習得していかざるを得ないのが現実である。たしかに、習うより慣れろというのは一面の真理であり、現在活躍している通訳者のほとんどはそうにして必要なスキルを身に付けてきたのであるが、通訳者にとって必須のスキルのひとつである NT の指導が、理論的にも実践的にも依然としてブラックボックスのままであるという現状は、早急に改善する必要があると思われる。

どの分野でも、教育方法論が確立していないのは、そのベースとなるべき理論がないことが最大の理由である。NT について言えば、そもそも発話を「理解」とはどういうことなのかといった基本的な問題から、発話中のどの要素を、どういう理由でノートにとるべきか(あるいはとらないか)という問題、あるいは断片的な「ノート」からフルメッセージを回復する際に、通訳者は頭の中でどのようなことをしているのかといったさまざまな問題について、何らかの理論的な説明が用意されなければならない。教育実践は、そのような理論的枠組みに基づいて行われるべきものである。本発表では、染谷 (2005, 2010) で示された NT の理論的考察をさらに発展させ、これを教育現場での具体的な指導法として体系化した試みについて紹介しながら、その問題点と今後の課題等について議論したい。併せて、NT 訓練の英語教育への応用、とりわけ言語産出訓練への応用(染谷 2011)の可能性についても言及する。

染谷泰正 (2005) 「通訳ノートテイキングの理論のための試論——認知言語学的考察」『通訳研究』第 5 号 (pp. 1-29)

染谷泰正 (2010) 「プロ通訳者による通訳ノートおよびノートテイキングの実験的研究」日本通訳翻訳学会第 11 回年次大会口頭発表

染谷泰正 (2011) 「英語教育におけるプロダクション訓練の方法論とその理論～インプットからアウトプットへの橋渡し」 関西大学外国語学部紀要第 5 号 (pp. 93-132)

2 日目 B 会場(3-305) 11:45 – 12:15

司会 稲生衣代

B-8

日英語間同時通訳のストラテジー—実践と養成の観点から—

小松達也 (国際教養大学)

言語構造を異にする言語間の同時通訳はより困難であり特別の工夫と努力を必要とするという考えには根強い支持があるようだ。Seleskovitch, Lederer のような「意味の理論」派による異論はあるが、英語・ドイツ語、英語・中国語間などについては Setton, Seeber などの研究がこの考えを支持するものとして知られている。言語間差異が顕著な日本語・英語間についての実証的な研究は今後の通訳研究に寄与するところが大きいと考えられる。この点で昨年の本大会で発表された水野論文は貴重な貢献であろう。

筆者は 50 年にわたって日英語間の同時通訳者として活動し、また通訳者の養成・訓練にも従事してきた。この経験から、この課題が特に意味を持つのは養成・訓練との関連だと思われる。この見地から本研究では教育・養成の場に適用可能な具体的で一般化されうる日英語間同時通訳のための方略の探求を試みる。研究ではまず約 100 名の第一線通訳者を対象に、英語→日本語間の同時通訳について仕事の現場でどのような対応と選択がなされているかについてアンケート調査を行った。結果は回答者のほぼ全員が日英語間同時通訳の困難性を意識し、原スピーチの進行に遅れないような努力 (EVS の長さなど) をしていることを明らかにした。また多くの通訳者が「ST の主要なポイントを落とさない」、「分かりやすい、日本語として自然な訳文を作る」ことを重視していることが分かった。

次に記者会見、テレビでの対談などオーセンティックな場での 3 名の通訳者のパフォーマンスをダブルトラック録音した結果を主として EVS の長さ、予測性、TT としての自然さの面から分析した。アンケート調査と通訳結果分析の結果は、日英語間においても望ましい質を維持しつつ同時通訳を行うことが可能であることを示唆する。

2 日目 B 会場(3-305) 13:45 – 14:15

司会 山田 優

B-9

Teaching Translation Technologies: a Task-Centered Approach

Tony Hartley (Tokyo University of Foreign Studies)

Translation technologies such as machine translation (MT) and translation memory (TM) have featured in vocational translator training courses in Europe since the mid 1990's. Germany took the lead, followed closely by Ireland, Spain and UK. In the early 2000's the EU-funded eCoLoRe and eCoLoTrain projects developed multilingual e-learning materials which effectively enabled the integration of these technologies into academic programmes in Northern, Central and Eastern Europe. At the same time, many software vendors have seized the opportunity to offer free academic licences in order to promote their products to future professional translators.

In Japan, in contrast, such technologies are conspicuous by their absence from translation curricula. This is despite the fact that six of the world's biggest Language Service Providers (translation companies) are Japanese and bemoan the shortage of technology-savvy graduates. However, the publication this year of the report on the *Training Translators in the Age of Revolution in Translation* symposium at St. Paul's University in Tokyo provides evidence that some institutions at least are preparing to venture into this territory.

This talk draws on over 15 years of experience teaching intensive and extensive courses on MT, TM and other tools in UK, France, Italy, Spain and recently Japan. It makes a case for rejecting the tool-based approach still prevalent throughout Europe. The latest tools are no longer mono-functional – for example, some MT systems incorporate TMs and term extraction. So the talk suggests instead a task-based approach which mirrors the workflow of a commercial translation project. Since the competing and complementary tools available open several possible paths through this workflow, students are faced with experimenting to find an optimal solution. This brings a welcome evaluative dimension to the exercise. Moreover, the outputs of one project can be re-used in other projects, which again alters the terms of the experimentation to good pedagogic effect.

2 日目 B 会場(3-305) 14:25 – 14:55

司会 山田 優

B-10

MNH-TT to Support Collaborative Translator Training

Tony Hartley (Tokyo University of Foreign Studies)

Kyo Kageura (Tokyo University)

Martin Thomas (University of Leeds)

Masao Utiyama (NICT)

Increasingly, both commercial and non-commercial translation rely on highly collaborative activity. Thus, we contend, students aiming for a career in translation gain from early exposure to such a working model. On analysing a range of commercial and not-for-profit translation platforms, we identified, from our social-constructivist pedagogical perspective, a major defect. By allowing neither for preserving a trace of interactions nor for relating these interactions to the intermediate products generated during the workflow, they deny participants the chance to later reflect on them. To scaffold the trainee experience, we therefore decided to extend an existing platform – *Minna no Hon'yaku (Translation of/by/for All)* – with five functions. First, each participant is assigned one or more roles which map into various workflows. Second, communication between role-players is structured by a menu of dialogue acts, each act linked to an entity in the translation project. Third, a menu of revision categories is used to motivate individual edits. Fourth, these events are recorded using an extended TMX notation and can be visualised graphically via a dashboard to answer such questions as: Where within the workflow are the peaks in interaction? Do these correlate with significant modifications to the translation product? Finally, all the users' look-up actions (dictionary and web searches) are recorded in order to build a full picture of which reference sources students consult at which stage in their translation activity.

A first working version of *Minna no Hon'yaku for Translator Training (MNH-TT)* has been implemented and will be deployed from autumn 2013 with invited users inside and outside Japan. The development is supported by a JSPS grant in aid for five years from April 2013. The paper will describe the design rationale and demonstrate the functionality of the system. [285 words]

2 日目 B 会場(3-305) 15:05 – 15:35

司会 水野 的

B-11

同時通訳の習熟度比較:大学院授業での韓-日同時通訳を中心に

金漢植 (韓国外国語大学)

通訳翻訳大学院の学生を対象としたアンケート調査で、「一生懸命勉強したつもりだが、どれだけ実力が伸びたかわからない」という悩みが多いことがわかった(金漢植:2012)。陸上のトラック競技や高さ・長さを競う種目などは、記録を数字で示すため、選手たちは今の自分がどのくらいのレベルに到達したか、過去に比べてどれだけ記録が伸びたかなど、確認が容易である。通訳の勉強においても、習熟度やレベルをデジタル化することはできなくても、何らかの形で通訳能力を測ったり比較ができれば、学習意欲の向上につながると思われる。

韓国の通訳翻訳大学院、日本語科2年生1学期の同時通訳授業で、16人の学生を対象に、学期の初めとおよそ3か月後の学期末に全く同じテキストで学生たちに韓-日同時通訳をさせた。テキストは8分ほどの長さ、経済に関する内容で、学期の初めに通訳した後もテキストは渡さず、期末に通訳の比較をするとの話もしなかったので、ほぼ同じ条件で通訳していたと言える。

2つの通訳に対し学生自身と教師が、3か月間でどんなところが良くなって、どんなところがあまり良くなっていないかを評価し(学生には自由記述式で書いてもらった)、通訳全般についてスコアもつけ比較した。それをもとに、全体として主にどのような能力が向上し、逆に向上していないか、学生の自己評価と教師の評価にはどんな差異があるか、学生の間ではどんな個人差があったか、などについて考察した。

学生の感想として、「自分の通訳を聞き比べ、変化したところが確認できてよかった」などと、肯定的な反応が多く、こうした方法で学生たちが達成感を感じ、学習意欲を高められる通訳教授法としていきたい。

1 日目 C 会場(3-301) 14:10 – 14:40

司会 水野 的

C-1

通訳練習を取り入れた英語授業の実践報告—短大における授業レポート及びアンケート分析—

中島美智子 (フリーランス)

本発表は通訳練習を英語科目に取り入れることにより、受講生の英語の4技能のうち、特にリスニング力・スピーキング力を向上させることを目指した授業実践の報告である。

発表での当該学生(20人)の英語力は TOEIC410-550 点までで、その多くは TOEIC500 点台、英検準 2 級程度であった。近年、大学英語教育の中に ESP(English for Specific Purpose)教育の一環として「通訳科目」を取り入れている大学が増えつつある。

本発表はプロの通訳養成のための訓練ではなく、英語力がそれほどない学生に、通訳訓練方法を使って英語力全般、特にリスニング力、スピーキング力を上げることができるかを試みた授業の実践報告である。また、あまり、英語が得意ではない学生たちに、授業に対するやる気をいかに持たせ、継続させるか。自主学習の態度を身に着けさせるにはどうすればよいのか。学生主体の授業にするにはどうすればよいのか。発表者の試みた具体的な取り組みを発表する。

また、「シャドーイングなどの通訳練習がどれだけ自分の英語力 (4 技能) 向上に役立つと受講生は思っているのか」、「耳から入る情報を処理し、別の言語に置き換えるための通訳練習でリスニング、スピーキング力が向上すると感じているのか」、「受講生がどのように通訳練習を評価しているのか」といった問題を調査する為、平成 23 年度秋学期の終わりに関西外国語大学短期大学部 2 年生の『通訳基礎研究』のクラスでアンケートを実施した。発表ではその結果を分析し、受講生が通訳練習の効果をどの程度認識したかを確認し、今後の課題について検討したい。

1 日目 C 会場(3-301) 14:50 – 15:20

司会 水野 的

C-2

日本語も英語も母国語としない学生が日⇄英通訳を学ぶ際の課題と克服策の研究

佐藤あずさ (早稲田大学大学院国際コミュニケーション研究科)

通訳は母国語と母国語並みに話せるもう一つの言語(準母国語)の二カ国語間で行うものというのが通訳界における国際的な標準であり常識でもある。実際現在の日本のプロ通訳者養成の現場においてもほとんどが日本語を母国語とし英語を準母国語とする人たちを対象として指導が行われている。(まれに英語を母国語とし日本語を準母国語並みに話せる人達も履修していることがある。)しかし昨今の大学の教育現場では、日⇄英通訳を教えるクラスであっても、履修者には中国人や韓国人など日本語も英語もどちらも母国語としない学生達が増えている。(発表者が勤務する早稲田大学院国際コミュニケーション研究科の日⇄英通訳ゼミにおいては9月入学生を加え日本語も英語も母国語としない学生たちが過半数を占める状況となる。)

母国語を介さないで行う日⇄英通訳の指導法はいまだ確立していないため、日本語や英語が第二、第三言語となる学生達が日⇄英の通訳を習得する際に直面する具体的な課題を明らかにし、その課題を克服するための手段開発が必須な状況にあり、現在その作業に着手している段階である。具体的にはソース言語のリスニングコンプリヘンション力、言語間の変換・運用力、ターゲット言語における表現力、の大枠三つに分け、それぞれの中でも特に学生の苦手とするプロセスを同定し、教員の指導法と学生の学習法の両面から有効な学習法を考察中である。まだ初期段階にある本研究であるが、現在までに整理できた事柄を発表し、ご批評いただくことにより、今後さらにテーマを発展させていきたい。また同課題を抱える他教育機関の指導者の方々のご助言もいただきたい。

1 日目 C 会場(3-301) 15:30 – 16:40

C-3

ワークショップ 通訳における<概念化>をめぐって

船山仲他 (神戸市外国語大学)

水野 的 (青山学院大学)

染谷泰正 (関西大学)

通訳という総合的なプロセスを理解するためには、通訳者が直感的に処理している部分も含めて通訳プロセスの全体像を明らかにすることが必要である。特に同時通訳のパフォーマンスを向上させるには諸要素の働き方の総合的説明が求められる。通訳作業において言語変換を遂行する通訳者の頭の中では、言語記号の意味の把握にとどまらない概念の広がり、深化が動的に進行していると考えられる。そのメンタルな状態を支える背景知識や論理構成力の必要性などについてはいろいろな観点から議論されている。また、言語学の分野でも、認知言語学、関連性理論、談話表示理論、実験言語学などの議論の中で、いろいろな関連する視点が提起されている。

しかし、世界的に見ても通訳プロセスの内的表示をどのように操作的に定義するのかに関する研究は極めて少ない。通訳のプロセス研究が停滞しているように見えるのは、それと無関係ではない。本ワークショップでは通訳の概念化、内的表示と通訳プロセスといった通訳研究最先端のテーマを取り上げる。

- ・ 概念化をベースに通訳作業の全体像をまとめる (船山)
- ・ *mentalese* ではなく自然言語による変換ストラテジーと作動記憶で説明する (水野)
- ・ オンラインで進行する通訳者の内部プロセスを、逐次通訳におけるノートテイキングのデータを手掛かりに説明するとともに、通訳訓練との関係を探る (染谷)

2 日目 C 会場(3-301) 9:45 – 10:15

司会 稲生衣代

C-4

Consecutive Interpreting Approach に基づく英語指導法の実際 ～その具体的効果と学生による授業評価から～

飯塚秀樹（自治医科大学）

1. はじめに

本アプローチは、シャドーイングとリプロダクションのループを通じて、正確なプロソディーを伴った音声言語の獲得を目的とするアウトプット重視型の指導法である。

今回の発表では、実践風景の動画を用いて、本アプローチが教室でどのように機能するのかを紹介すると共に、その具体的な効果、及び学生達がこの指導法をどのように捉えているのかを考察する。

尚、本発表は文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「逐次通訳アプローチによる外国語指導法の効果とその汎用性の確立に向けた基礎的研究」(課題番号 24520642)の一部となる。

2. 理論背景

プロソディーとは、アクセント、イントネーション、センスグループ間のポーズの置き方、センテンス・ストレス、あるいは音の連結や弱化、吸収等を含む音声要素の総称である。染谷(1996)によると、このプロソディーは自然なコミュニケーションにおける意味伝達のおよそ 30～40%をも担っているとされる。つまり、プロソディーの獲得なしには、音声言語の正確な受信・発信は著しく困難となる。

そこで、飯塚(2010a, 2011, 2013)では、プロソディーセンス獲得のためのシャドーイングと、シャドーイングに欠落する「自ら情報を発信しようとする意識」を補うためのリプロダクションを、逐次通訳の枠組みの中で有機的に統合し、本アプローチを構築した。

3. 実践環境

自治医科大学看護学部在籍する英語履修者を対象とし、2 年間本アプローチに基づく授業を展開した。対象者数は 1 年目 74 名、2 年目は 104 名となる。

4. 結果

1 年目は TOEIC リスニング・リーディング問題を用いた事前・事後テスト間で有意な点数の伸長が見られ、2 年目では中間言語の産出量に変化が見られた。

また、本学 Faculty Development の一環として行われる「学生による授業評価」において、本アプローチに基づく授業は、4 点満点中 3.65 点という評価を得た。

5. 参考文献

紙面の制限により、当日の発表にて紹介する。

2 日目 C 会場(3-301) 10:25 – 10:55

司会 長沼美香子

C-5

マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』の翻訳に見る方言使用

浜元大輔（琉球大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

本発表では、マーク・トウェイン(Mark Twain)の『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*)の主人公ハックの南部訛りの英語と黒人奴隷のジムが話す黒人英語の翻訳に焦点を当てて分析し、文学作品における地理的・社会的方言などの非標準的な言葉が、日本語訳された場合にどのような影響を作品に与えるのか、これまでの訳出例を整理しながら考察する。

トウェインにとって方言の使用は文学的リアリズムを達成するための意図的なものであり、実際の話し言葉の描写によって地域に根差し人物たちを作り上げている(Berthe, 2000, p. 590)。日本語訳でのハックの言葉は、こうしたトウェインの意図を反映させる文体もあれば、標準的な口語体で訳されているものもある。一方でジムの言葉は、ほとんどの翻訳において原文の訛りを意識したものになっており、Mie Hiramoto (2009, p. 259)は、黒人奴隷などのマイノリティな立場にいる人物は、ステレオタイプなイメージをもった地域の方言が与えられると指摘している。このような先行研究を踏まえ、ハックとジムの訳出例を比較し、地域に独特な言語の使用がそのように変換されているかについてその歴史的概要を示しつつ、翻訳の違いが作品にどのような影響を与えているかを考察する。

地域方言が日本語に変換される時に、どのような変換プロセスを経て、そして作品解釈にどのような影響を与えるのだろうか。日本での翻訳が多い本作品の訳出例の分析は、翻訳における地方言語の扱われ方を示す一つの有効なサンプルを提示する。本発表では、更に地方方言の訳出が与える作品解釈への影響可能性まで踏み込んで分析することによって、文学作品の翻訳論を考えるためのアプローチを提示したい。

参考文献

Berthele, Raphael (2000). Translation African-American vernacular English into German: The problem of 'Jim' in Mark Twain's *Huckleberry Finn*. *Journal of Sociolinguistics*, 4(4), 588-613.

Mie, Hiramoto (2009). Slaves speak pseudo-Toohoku-ben: The representation of minorities in the Japanese translation of *Gone with the Wind*. *Journal of Sociolinguistics*, 13(2), 249-63.

2 日目 C 会場(3-301) 11:05 – 11:35

司会 永田小絵

C-6

翻訳作品と創作作品の比較から見た書き手の言語使用の個人スタイル

鄧敏君 (致理技術學院 應用日語系(台湾))

本研究は、同一書き手による翻訳作品および創作小説における言語使用の特徴を比較し、言語接触の場における翻訳行為の特徴を明らかにすることを目的としています。研究対象である劉慕沙(LIU Musa, 1935-)は、いままで数多くの日本文学作品を中国語に翻訳しており、台湾の代表的な日本文学の翻訳者の一人と言える。劉慕沙は60年代に中国語で書かれた短編小説をいくつか発表したが、1965年以降は日本文学を台湾に紹介する翻訳活動に専念してきた。本研究は、劉の60年代に執筆した短編小説5作(《助選記》、《再見，斧頭坡》、《生》、《喬遷之喜》、《春心》)によるサブコーパス、および1960–70年代の翻訳作品3作とその原文(陳舜臣『黒いヒマラヤ』—中国語翻訳《黒色喜馬拉雅山》1965年出版、三島由紀夫『潮騒』—中国語翻訳《潮騒》1970年出版、三島由紀夫『美德のよろめき』—中国語翻訳《美德的動搖》1970年出版)からなるパラレルコーパスを構築し、コーパス言語学の量的な研究方法を用い、翻訳作品および創作小説における高頻度語彙、品詞の使用頻度など語彙使用の傾向、および文の長さや直喩の使用などの文体的な特徴を観察することで、翻訳作品と創作作品における共通点と相違点を明確にし、翻訳作品と創作作品における言語使用の個人スタイルを体系的に記述する。この事例研究より、書き手の言語使用の特徴が翻訳テキストに及ぼす影響を掘り下げ、訳者個人スタイルの日中コーパスの翻訳研究の基盤を築きたい。

2 日目 C 会場(3-301) 11:45 – 12:15

司会 西村友美

C-7

大学・大学院における実務翻訳教育の再考～翻訳初心者に対する機械翻訳＋ポストエディットの導入の試み～

山田 優 (青山学院大学)

日本の大学・大学院における時間的に限られた翻訳授業プログラムにおいて、翻訳支援ツール等に関する演習をどのように折り込むかは、1 つの課題である。プロの実務翻訳者を対象にした効率性や品質の実証研究は数多く存在するが、学生、とりわけ教育の立場から調査した研究は、まだ少ない。発表者は、2013 年度の前期の大学授業内で Google 翻訳者ツールキットや機械翻訳＋ポストエディットを活用し、学生が課題演習などを行った。本発表では、これらの試みを通して観察した学生の反応、態度、翻訳結果(品質)などをまとめた報告を行う。また、日本国内での翻訳教育という文脈を考慮し、今後の課題やツール教育の意義を考える。翻訳の初心者に対して、「訳すこと」に対する「気づき」を促すためのツール活用という側面からも考察したい。

現時点での日本語と英語の間でのポストエディットは、発展途上の手法であると言わざるをえない。そのため実務者や教育者の間でも否定的な意見も多い。しかし急速に発展する機械翻訳の精度と業界における翻訳需要の高まりを考慮すると、ポストエディットは、近い将来、1つの確立した翻訳手法にもなりうる。逆に言えば、ポストエディットを学生が体験することで、「翻訳すること」の意味・意義—翻訳(者)とは何か—を考える機会になる。

2 日目 C 会場(3-301) 13:45 – 15:35

C-8

通訳教育および指導法研究プロジェクト・翻訳研究育成プロジェクト合同シンポジウム「大学における通訳・翻訳教育の社会的意義」

基調報告・司会＝鳥飼玖美子（立教大学）

通訳教育パネリスト＝中村幸子（愛知学院大学） 稲生衣代（青山学院大学） 西村友美（京都橘大学）

翻訳教育パネリスト＝田辺希久子（神戸女学院大学） 長沼美香子（元立教大学） 野原佳代子（東京工業大学）

企画・調整＝河原清志（金城学院大学）

本シンポジウムは、日本学術会議による提案書「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準—言語・文学分野」で示されている「通訳・翻訳」の内容を報告し、それを敷衍して「通訳教育および指導法研究プロジェクト」及び「翻訳研究育成プロジェクト」から複数のパネリストが大学における通訳・翻訳教育の社会的意義について具体的提言を含めて発表する。

具体的な内容は、以下の通りである。まず、(1) 基調報告として、発表者①は上記提案書執筆に至る日本学術会議での議論の背景や経緯を報告し、提案書の内容を敷衍しつつこれからの大学教育における通訳・翻訳教育の在り方について展望する。次に通訳教育から、(2) 発表者②は、通訳学習の成果発表としての模擬国際会議および同時通訳実践が monolingual 教育では味わうことができない経験をもたらしたことから、direct method を越えた訳すことの意義を論じる。また、(3) 発表者③は、グローバル人材の育成が優先課題の一つとして掲げられている大学において通訳教育が果たせる役割について interpreting competence の視点から考察する。さらに、(4) 発表者④は、通訳を学ぶ学生が他学部学生とともに国際フォーラムの運営や海外招聘研究者のアテンド通訳を体験する合同学習プログラムを挙げ、その社会的意義を考察する。次いで、翻訳教育から、(5) 発表者⑤は、アンケートやインタビューからわかる翻訳学習者の期待は単純には割り切れない複数の要素を含むことを踏まえ、大学での翻訳教育という文脈で教える側と教えられる側の接点を考える。また、(6) 発表者⑥は、旧翻訳研究分科会が実施した翻訳教育調査の分析結果を確認し、日本の大学における「記述的翻訳教育」というコンセプトを提言する。さらに、(7) 発表者⑦は、近年科学コミュニケーションの重要性が指摘される。人の連携の基盤であるコミュニケーションの目的に応じた調整を扱う翻訳教育の理工系人材教育における可能性を議論する。最後に質疑応答の時間を設け、フロアーの参加者と活発な議論が持てることを期待している。(835 字)

2 日目 C 会場(3-301) 15:45 – 16:15

司会 稲生衣代

C-9

学部生の通訳ボランティア経験 実践報告

友野百枝 (大阪女学院大学)

大学学部で通訳科目を教えるところは増えたとはいえ、習ったことを教室外で実践できる機会は稀である。日本の通訳者養成の主流がまだ民間の通訳学校にあり、大学学部では通訳の概論を学び演習を通して基礎的な通訳スキルを学ぶ他は、多くの時間が英語力の向上に向けられている。現実は近年もあまり変わっていないようである。従って大学で通訳の勉強をしても将来の仕事に結びつかないというネガティブな評価がついてまわり、優秀な学生を惹きつけるのが難しいのが現状である。

大阪女学院大学では、数年前から外部から外国人講師を招いて学内で講演会を開き、学生に会の運営や通訳の手伝いをさせる試みを続けてきた。しかし、コーディネーターとしての教師の苦労が多い割には学生への教育効果は少ないという印象が拭えなかった。広報、受付、会場設定、講師とのコミュニケーション、記録など通訳以外ではかなり力が発揮できることがわかったが、通訳の実務に関しては実質的な役割を果たせなかった。

2013 年春に、大阪で 8 月半ばに行なわれる大規模な国際会議に通訳ボランティアを派遣する依頼が舞い込んだ。ITAA 国際大会 in Osaka という TA (交流分析) に関わる人たち (主として、精神科医、心理カウンセラー、TA の講師、企業の人事専門家、そして TA を学んでいる人たち) が約 600 名も国内外から集まる国際会議である。

過去の経験から見ても大変無謀な試みだと知りつつも、いい機会ではあると思ったので学内募集してみた。4 名が応募し、そのうち 3 名が実際に会議の分科会の通訳を行なう運びになった。この学生たちに、専門用語・知識の吸収、通訳スキルの向上、通訳の現場での留意点について特別訓練プログラムを作り現在実践中である。

JAITS 年次大会では、この学生たちの通訳経験を振り返り、何ができて何ができなかったかなど、その教育的成果を報告したい。